上唇に発生した軟骨性汗管腫の1例

河野 信彦

A case of chondroid syringoma of the upper lip

Nobuhiko KOHNO

Abstract: The author reports a 31-year-old man with a chondroid syringoma on the upper lip. Histopathological examination showed that the tumor cells were arranged in one or two layers with a solid or trabecular pattern. In the stroma, myxomatous or chondroid structures were seen.

Key words: chondroid syringoma (軟骨性汗管腫), mixed tumor (混合腫瘍), upper lip (上唇)

緒 言

軟骨性汗管腫 (chondroid syringoma) は、間葉組織と上皮組織よりなる汗腺由来の比較的まれな良性腫瘍である。その多くは20~60歳の顔面や前額部の皮膚に好発し、皮膚科領域での報告が多く口腔領域での報告は少ない。今回、上唇に生じた軟骨性汗管腫を経験したので文献的考察を加えて報告する。

写真1 初診時口腔外写真

症 例

患 者：31歳 男性。

初診日：1993年2月■日。

主 訴：左側上唇の腫瘤。

既往歴：特記事項なし。

家族歴：特記事項なし。

現病歴：1992年4月頃、左側上唇皮膚の小膿瘍に気づき、指で潰して内容液を出した。その後、腫瘤が生じ次第に大きくなったので当院を受診した。

現 症

全身所見：体格、栄養状態ともに良好にて特記事項なし。

局所所見：左側上唇の皮膚に小指頭大の腫瘤を触知した。半球形に隆起し中央部はやや褐色を呈していた。腫瘤は弾性硬で皮膚とは癒着し、下在組織とは可動性を有し、圧痛や自発痛は認めなかった(写真1)。

臨床診断：多形性腺腫の疑い。

処置ならびに経過：局麻下にて切除手術を施行した。

写真2 摘出物写真

山口臨床研究会

(主任：河野信彦)

Yamaguchi clinical study group (Chief: Nobuhiko Kohno)

受付日：平成5年7月26日

腫瘤は周囲との癒着はなく一部皮膚を含み、容易に切除できた。腫瘤の大きさは0.7×0.5×0.5 cmの二分葉で、表面は滑沢、弾性硬で赤褐色、一部白色を呈していた。

写真 3 剖面写真

剖面は充実性で、灰白色およびやや褐色を帯びていた(写真2, 3)。術後、6か月を経過しているが予後は良好にて再発は認めていない。

病理組織学的所見：皮膚の表皮は中等度の過角化ないし錯角化の所見を示し、真皮中層から皮下組織にかけて腫瘍結節が認められる。類円形でやや腫大した核を有する淡い胞体は、主に充実性ないし索状構造を呈している。一部には嚢胞様変形も認められる。間質においては粘液腫状の変化を示す chondroid matrix を示唆する部分も見られた。以上の所見よりエックリン汗腺との関連が示唆された。

病理組織学的診断：軟骨性汗管腫 (so-called eccrine mixed tumor) (写真4, 5)。

考 察

組織学的に特異な像を示す比較的小な軟骨性汗管腫は、1892年 Nasse¹⁾ によって上皮組織と間葉組織から成る皮膚の腫瘍として最初に報告された。そして1961年 Hirsch ら²⁾ がこの腫瘍を chondroid syringoma (軟骨性汗管腫) という名称を提唱してから、一般に使用されるようになった。

本症は一般に顔面の皮膚、すなわち鼻翼部や頬部に好発し、上唇はそれらに次ぐ好発部位である²⁾。皮膚における特徴的な腫瘍でしかも口腔粘膜との関連性がないためか、口腔領域からの報告はきわめて少なく、そのほとんどが上唇での報告である^{3,4)}。性差においてはやや男性に多く^{2,5)}、本邦における Kunikane ら⁶⁾ の報告においても13例中8例が男性であった。好発年齢はほとんどが成人で、平均年齢が48~55歳^{2,4)}と中年層から壮年層に多く、若年層に少ないのが特徴である。自験例においても31歳の男性であった。

臨床症状としては、無痛性で弾性硬の腫瘤として出現

写真 4 索状に増殖した腫瘍細胞 (H-E 染色, ×100)

写真 5 軟骨様部分を示す (H-E 染色, ×200)

し、発赤や自発痛の炎症所見はみられないのが普通である。腫瘍の大きさは0.8~1.3 cm, 0.5~3 cm^{3,7)}の範囲内であり、このことは顔面や前額部の発生が多いため、あまり大きくないうちに気づき、早期受診が可能なためであろう。本症例においても、患者本人はあまり心配していたわけではないが、少し気になるという程度の訴えであった。

臨床診断としては Hirsch ら²⁾ は皮脂嚢胞あるいは嚢胞とされ、皮膚の混合腫瘍を疑うことはほとんどないとしている。他の鑑別診断としては線維腫、粉瘤腫、若年性メラノーマ^{4,6)} があげられる。さらに、基底細胞癌も重要な鑑別診断の1つであるが、基底細胞癌は潰瘍形成が特徴であるので、その鑑別にはあまり混乱はきたさない⁷⁾。しかし、本症例のごとく、きわめて粘膜に隣接して存在した場合は多形性腺腫との鑑別も考慮しなければならないと考える。

組織学的には特徴的な像を示すため、その診断は容易である。すなわち1~2層よりなる管状あるいは嚢胞状内腔構造を有する腫瘍細胞が索状あるいは島状に増殖し、基質には粘液様ないしは軟骨様間葉組織の存在を示すものである。本症は一般に良性であるが、悪性で長い経過の末、不幸な転帰を迎った報告^{8,9)}もあり、注意深く長期的な経過観察が必要である。

結 語

今回、31歳男性の上唇皮膚に生じた軟骨性汗管腫を経験したので文献の考察を加えて報告した。術後6か月を

経過しているが、再発はなく予後は良好である。今後も長期的観察を行う予定である。

本論文を作成するにあたり、ご教示を頂いた山口県立中央病院病理科部長亀井敏昭博士に深謝致します。

引用文献

- 1) Nasse, D.: Ein Hauttumor vom typ der Speicheldrüsenmischgeschwülste. *Arch Klin Chir* 44: 233-238 1892.
- 2) Hirsch, P. and Helwig, E.B.: Chondroid syringoma. *Arch Dermatol* 84: 835-847 1961.
- 3) Triantafyllou, A.G. and Rapis, A.: Chondroid syringoma of the upper lip. *J Oral Maxillofac Surg* 44: 744-748 1986.
- 4) 堀井正孝, 木下靖朗, 他: Chondroid syringoma (軟骨性汗管腫) の1例. *日口外誌* 34: 2022-2024 1988.
- 5) Stout, A.P. and Gorman, J.G.: Mixed tumors of the skin of the salivary gland type. *Cancer* 12: 537-543 1959.
- 6) Kunikane, H., Ishikura, H., et al.: Chondroid syringoma (mixed tumor of the skin). *Acute Pathol Jpn* 37: 615-625 1987.
- 7) Nasser, N.A. and Dodd, S.M.: Chondroid syringoma. *Int J Oral Maxillofac Surg* 16: 521-523 1987.
- 8) Ishimura, E., Iwamoto, H., et al.: Malignant chondroid syringoma. *Cancer* 52: 1966-1973 1983.
- 9) 金野俊之, 永沢義安, 他: 頬部に発生した悪性澄明細胞汗管腫の1例. *日口外誌(抄)* 36: 2200-2201 1990.